

子どもと教育・文化 道民の会

会報

発行日 2021年11月 3日
発行責任者 共同代表
姉崎洋一 井上大樹
加藤多一 河野和枝
事務局 〒060-0042
札幌市中央区大通西12丁目
北海道高等学校教職員センター
3階
TEL 090-9523-4396
FAX 011-663-0457

メールアドレス：
kodomotokyouiku@gmail.com
ホームページ：
kodomotokyouiku.jimdo.com

会員のみなさん

コロナ感染拡大が一定程度抑えられる傾向になってきましたが、いかがお過ごしでしょうか。昨年初めからの2年間、大人も子どもも様々な日常に異変をもたらしてきました。とりわけ、子どもたちの成長発達に著しい困難をもたらしています。

私たち「道民の会」事務局は、集まること自体が難しい中ですが、月に一度程度の「オンライン事務局会議」を行い、「コロナ禍の子どもたち」の現状や課題を話し合いながら、「さっぽろフェスティバル」「全道合研」「シンポジウム（他団体との共催）」などにもとりくんできました。

会報発行は本年2月以来になりますが、この間のとりくみの報告と会員からの寄稿文などを掲載した「会報 No46」発行いたしました。

「会報 No46」には、お忙しい中、下記の方々に執筆していただきました。

ご一読ください。

また、会報最終ページには、【事務局からのお願い】を掲載していますので、是非ご覧ください、メールアドレスの登録などお願いいたします。（事務局 柳 悌二）

【会報記事】

1. 「巻頭言」

(1) 「データにみるコロナ禍の子どもたちとアフターコロナ」 共同代表 河野和枝

(2) コロナ禍の若者と選挙—総選挙前だからこそ思う「誰が山を動かすのか」 共同代表 井上大樹

(3) 映画「MINAMATA」が呼び起こしたもの—水俣病と人間のいのちの価値 共同代表 姉崎洋一

2. さっぽろ〈子育て・教育〉フェスティバル2021の報告 代表世話人 谷 光

3. さっぽろ 子ども・若者白書2020」発刊記念第3弾シンポ 代表世話人 柳 憲一

4. 「社会的養護」を考える 本間康子（高校教諭）

5. 「教育全国署名にご協力下さい」

(1) 35人学級から20人以下学級へ 今年度、大きな一歩が 川村安浩（道教組）

(2) 20人学級は希望です！ 道端剛樹（道高教組）

6. 「地方の高校をつぶすな！～高校配置計画～」 道端剛樹（道高教組）

7. 寄稿

(1) コラム「先生、俺、なんどもこの名刺に救われたんっすよ。」 道端剛樹（道高教組）

(2) コロナ禍の下で子どもたちが求めているものをめぐって 戸田 輝夫（会員）

8. 【資料】2021年度「全国学力・学習状況調査」結果公表に当たって（見解）

9. 【ご案内】『全道合同教育研究集会』が行われます！

10. 【事務局からのお願い】

「巻頭言」

「データにみるコロナ禍の子どもたちとアフターコロナ」

共同代表 河野和枝

新型コロナウイルス感染者数がここに来て急激な減少を示しています。コロナワクチン接種者が全国民の7割近くに達したことがその要因と言われていますが、何にしろ「感染恐怖」からほんのわずかでも遠退いたことに安堵しています。しかし、報道では、増加するブレイクスルー感染者、冬場での第6波到来の予測、あらたな変異株の出現と拡大など先行きの見通しが付いていないのが現実です。感染者数の減少を喜びながらも浮ついた言動は慎み従来どおりの感染対策をしっかりと取ることが重要と言うことでしょう。

さて、私も含め今を生きる人々にとって未曾有の経験である昨年来のコロナ禍、社会の隅々まで照射されたその現実、それまで積み残されたまま放置されていた「人間社会のありさま」を隈無く暴露させ炙り出しました。つまり、私たち一人ひとりが大切にされてこなかった社会構造、強調する「自助」を押しつける政治の歪みが今露呈されています。私たちは「コロナ禍以前の社会にもどりたい」と切望しますが「アフターコロナは新しい枠組みの社会創造、実現」がどうしても必要です。取り組まなければなりません。とりわけ大人社会の現実に取り込まれやすい立場にある「子ども」に焦点を当て、今日炙り出された現状をいくつか見てみたい、そしてみなさんと共有したいと思います。

コロナ禍と格差社会・子どもの貧困

格差社会と子どもの貧困問題が国民を分断しています。昨年3月、政府はコロナ対策として全国一斉休校（保育所、学童保育所も一部の子どものみに制限した）を実施しました。子どもが自宅にいて働くことが出来なくなり親の特に母親の就労と生活に大きな影響を受けました。中でもシングルファミリーの家族は、その影響を直撃し家庭経済の逼迫状況を著しく低下させ食べることも出来なく

なるという事態に陥りました。学校での給食がなくなり体重を3～5kgも減らして登校してきた子どもたちが多くいたと報告されています。政府による一時的救済措置が取られても日々の生活は改善されず今も困窮状態が続いています。国際NGOセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンのプレス発表「夏休み 子どもの食応援ボックス 利用者アンケート結果」（2021,9,22）によると、3割の世帯で収入が半分以上減少、1割以上が収入ゼロに、約6割世帯が「十分な量の食料を買うお金がない」と回答（回答件数 3,141 世帯）しています。セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの事業「食の応援ボックス」を利用する家族へのアンケートとはいえこの結果におどろくばかりです。また「寄せられた声」には、子どもたちがご飯を食べられるように自分は一日一食にしています（30代女性）、収入がないに等しいのに子どもの学校の必要経費は払わなければならない。自分の着るものや持病の通院代を削るしかない。それでも足りなくて学校の経費を滞納している（40代女性）など切実な生活困窮が数多く回答されています。子どもの貧困が7人に1人と言われてから久しい、見ようとしなくては見えない貧困とも言われてきました。私たちの国は子どもの貧困対策に成果を上げていない結果と断定出来ます。（<https://bit.ly/3zmXhVW>）

コロナ禍と不登校&子どもの自殺、過去最多

新聞報道でも大きく取りあげられました。「不登校と自殺者が過去最多に 小中学生、コロナ禍化の不調が浮き彫りに」（朝日デジタル 2021,10,13）文部科学省の問題行動・不登校調査 2020年度によると、「不登校」の小中学生は前年度より8.2%増の19万6127人で過去最多、児童生徒の自殺者も415人で最多と報告されています。この数年余り、小中学生の不登校は増加傾向にありそ

の深刻さに教育行政が対応してこなかったところに、実施された一斉休校、分散登校などの生活の変化が多くの子どもたちの心身に不調を来したといえます。子どもたちのストレス過多状態については小児科学会など専門機関でも警笛を鳴らし、子どもの自殺への配慮を求めています。ちなみに自殺者の内訳は小学生 7 人（3 人増）中学生 103 人（12 人増）高校生 305 人（83 人増）です。

※警察庁統計では小中高生の自殺者は 507 人となっていて学校側が把握していないケースもあると見られています※一昔前までは子どもの自殺は考えられない、が社会通念でした。しかし現代はもはやそう言い切れない状況になっているのです。これらの数字から、子どもたちを追いつめ「生きる」ことに希望を持たせることが出来ない社会になっていることをしっかり見極め「子どもの発する悲痛な内面の声」を聞き取り引き受ける大人でありたいとあらためて自覚するものです。

ヤングケアラーの存在

私は 2006 年放映された NHK スペシャル「ワーキングプア」を見てこれが日本社会の現実なのかと驚愕したことを度々思い出します。大学にいたときは毎年学生たちと繰り返し視聴し感想を述べあう授業もしました。働けど働けど生活保護水準にも満たない収入世帯が 400 万世帯（全世帯の 10 分の 1）、働く貧困層が急激に拡大していった日本の姿がそこにありました。シングルマザーはもちろん、空き缶を拾い生活する無年金の高齢者、仕事が減少する仕立屋職員など幾人も登場していたその中に、北海道の地方都市で暮らす 10 代の姉妹がいました。姉は高校を卒業し希望する札幌の専門学校を諦め、地域の高齢者施設の調理場で働き妹もアルバイトをしながら高校に通っていました。映し出された公営住宅の一室にはうつ病で寝たきりの父親がいました。姉妹はこの父親の介護を小学生の時からしていたのです。姉は努力し調理師の免許を通信で取ったのですが、給料は一円し

か上がり落胆する様子や父の介護のため思うようにならないと語る姉妹の切ない現実が特に印象に残ったのです。まさに最近社会問題になりつつある「ヤングケアラー」の実態がそこにありました。もちろん当時は「ヤングケアラー」などという言葉さえ聞かれなかったのですが、子どもが家族の面倒を見るいわゆる「介護」の実態は長年放置されたままだったのです。在宅で高齢者、障害者などの介護を無償で携わる家族などをケアラーとしてその心労を問題視する中でヤングケアラーの存在に注視するようになりました。成長発達の権利、遊びの権利、自らの未来を創り生きる権利などの自由を子どもから奪うヤングケアラー、行政は動き出しましたが、実態の把握に基づく公的施策＝公助体制が緊急に必要です。子どもの成長にストップはかけられないのです。またヤングケアラーの社会問題は、子どもの貧困や不登校・子どものストレスなどとも深く関わり福祉制度の充実、教育と福祉の連携強化以外の解決策はありません。

「親ガチャ」談義

最近、若者たちの間で「親ガチャ」の言葉がよく登場すると言います。「親ガチャ？」聞き慣れない言葉です。硬貨を入れてカプセル入りのおもちゃを入手する自動販売機が語源らしい、つまり何が当たるかは運任せ、親ガチャもそれになぞらえ「どんな家庭環境に生まれるかは選べない」と言いたいとき「親ガチャ」を使うというのです。「俺は親ガチャのあたりが良くない。人生決まったものさ」と嘆く、いや、あきらめざるえない声なのでしょう。経済ガチャ、頭脳ガチャ、容姿ガチャ、顔ガチャ表現はいろいろですが、事態を変えることが困難であるという重たい内実を含ませた「親ガチャ」です。こんなことを言わせるのは、困難な家族を公的に支えない、放置している社会の問題と思いませんか。「子ども期」をのびのびと子どもらしく生きられるように、私たち道民の会もがんばらなければなりません。

コロナ禍の若者と選挙—総選挙前だからこそ思う「誰が山を動かすのか」

共同代表 井上大樹（札幌学院大学）

オリンピックもコロナウイルスの痛みを忘れる？頃に投票日

この数か月は政権党の「しぶとさ」「したたかさ」を改めて痛感した。あれほど、オリンピックでコロナウイルスの席卷とともに遠のいた「日常」に多くの人々がいだいたはずの恨みが、「疑似的政権交代」であったという間に水に流され、秋篠宮長女の結婚話でみな親族・友人になったかのような喧騒で「気が付いたら投票日」という世相をさらっと作り上げてしまった。自分に引きつく争点を見いだすことのない中、「投票に行こう」と俳優・タレントたちが YouTube に動画を出してまで訴えても、選挙カーの名前の連呼とさして変わらないインパクトにしかならないような気がしてならない。

コロナ禍で抱いた若者の社会へのギモンはどこへ

コロナ禍は、若者に社会や政治に対して切実な問題意識を掻き立てる絶好のチャンスだったのではないか。2000年代以降、教職を目指す学生の多くが「荒れる子ども」や「貧困にあえぐ子ども」に対して無関心、非寛容を示し、世代内でも深刻な分断を示す象徴的な事象であった。それがコロナ禍で「日常」が失われる中、友人との交流や打ち込みたい活動ができなくなり、「どうしてこうなったのか」「後輩たちには同じ思いをしてほしくない」と多くの子ども・若者が強い思いをいだいたのは周知の事実である。私が担当している教職課程の講義のコメントにはこれまであまり目にする事なかった「子どものために」「子どもの目線に立って」という言葉が大半の学生から出されるようになったのである。一方で「18歳選挙権」の定着を目指して前回総選挙では設置がすすんだ「学内投票所」の取り組みは、感染症対策との関係やそもそも学生

がキャンパスに通う機会が限られているなどで今回は停滞気味である。大学の講義も遠隔、オンデマンドではどこで自分の発言が SNS などで広まるかわからないというリスクを考えると、「投票に行こう」以上の踏み込んだ話もしづらいのが現状である。

足元から政治を語ることの強み—東京8区のできごとから学ぶ

コロナ禍は気軽に直接顔を合わせてたわいのない会話（井戸端会議）をする機会を大人からも奪った。今回の総選挙はいつにもまして「空中戦」、特に SNS などデジタルを活用した戦略が重要になっているらしい。これに関しては与党も野党もないのか、我先にとデジタル空間での「選挙戦」が活性化しているようである。一方、SNS はフェイクニュースが流布しやすく「ファクトチェック」もむなしく「広まったもの勝ち」という状況であり、プラットフォーム（GAFA など）がその対応に苦慮している。

一方で、東京8区では野党統一候補の調整で中央の意向（かどうかは不明な点もあるが）に地元の候補者を支援する人々が異例の駅前デモを行うほどの強い反対が実り、その候補で与党有力候補と互角以上の戦いを見せている。これは私にとって痛快なできごとだった。東京都では知事選挙でほぼ同じ組み合わせでの統一候補の調整に際し、立候補経験もあり政策もしっかりしていた有力弁護士ではなく有名ジャーナリストに中央の力技で調整した結果、本人のスクandalで「自滅」したことが記憶に新しい。知事選直後、私は都内で運動を地道に展開した人々に会うたびに後悔と恨み節をいやという程聞かされた。公示日直前にして東京8区の候補差し替えがニュースをにぎわさせていたころ、私は「このままでは終わらない」という胸騒ぎを覚え、その後の展開は皆様もご存じの展開である。

この件でもう一方の主演であった某政代表（元俳優）こそ、全国津々浦々を回りあらゆる弱者に働きかけ、生活苦にあえぐ若者を勇気づけていた点では、「若者を政治に引き出す」立役者の一人であることは間違いない。ただ、真の政治的信頼は時間をかけ、苦楽を共にする中で築かれるということを示した「できごと」であり、それを受け入れ東京都の比例代表に回った某政代表にも一定の評価を得ているようである。

もう「風」に政治を任せないことが「山を動かす」ことになる

かつては選挙区に「根ざした」活動は政権与党の常とう手段であった。小選挙区制の導入で、一見「政策」主体の政党対抗の選挙が可能になったようで、地元の切実な声を時には自党の方針と対立してまで貫く議員が少なくなった。一言で言えば政治が「軽く」なったのである。そして、軽い政治に嫌気のさした政権党の元ナンバー2が野党に移り「川上から川下へ」という選挙のイロハを叩き込んで名実ともに政権交代を成し遂げたのが2009年である。残念ながらその重みを忘れたのか、道内出身議員

の閣僚での失言、不祥事もあったが、中央の「軽い」政治に振り回されて政権を手放した人たちが今でも中央で与党と対抗軸をつくろうと苦慮している。民衆の声に根ざした政治を望むのであれば、SNSなどの危うきものに頼らざるを得ない「風」に任せすることはもうやめようではないか。

いわゆる科学者として十分な政治行動ができていない自分の戒めを込めて申し上げさせていただければ、子ども・若者の立場に立って行動のできる実績のある候補を地域の草の根の力で育てることをどこの選挙区でも模索しなくてはならない時期に来ている。時間はかかるだろう。ただ、核のゴミ最終処分場が争点となった寿都町長選挙では文献調査推進を掲げた現職が6選を決めたが、対立候補にあと200票ほどまで迫られ、住民投票を繰り返し強調せざるを得ないところまで「押し返した」。この問題が持ち上がってから約1年ということを考えれば、対立候補を中心とした取り組みは健闘と呼べる結果である。私自身もこの総選挙の反省を胸に「日々是政治」を胸に刻み、「日常」に向き合いたい。

（寄稿 2021年10月28日）

映画「MINAMATA」が呼び起こしたもの-水俣病と人間のいのちの価値

共同代表 姉崎洋一（北海道大学名誉教授）

映画「MINAMATA」を見てきた

今読んでいる『魂を撮ろう』の映画「MINAMATA」を見てきた。あのジョニー・デップが、本気で創ろうとした映画だ。力作と思う。

水俣病は、世界の公害の発生とその隠蔽に通じる人間的犯罪を深く考えさせる。しかも同時代だ。ユージンスミスとともに水俣に住み、ユージンとアイリーの共同製作になる写真集“MINAMATA”を撮ったアイリーン・スミスは、僕と同じ年（1950年）生まれ、同世代だ。

無論、「水俣病」を「知ってはいた」が、僕は、自分の問題として70年代に考えていただろうか？ 名古屋時代（1962-1996）に、四日市の公害（喘息他）は、身近に感得したが、新潟の「イタイイタイ病」も、水俣の「水俣病」も我が身の問題としてどれほどに受け止めていたのか？ 石牟礼道子の（『苦海浄土一わが水俣病』1972）も読んだ、色川大吉（『不知火海民衆史』上下、2020）や宇井純（合本『公害原論』1971）の調査団や熊大病院の原田医師の本（『水俣病』1972、『水俣病は終わっていない』1985）、あるいは、栗原

彬『証言 水俣病』2000、なども読んだりしてきた、だが未だに水俣を訪れてはいないことに愕然とした。埼大時代の指導院生 M 君は、水俣病を修論で扱い、一橋大の博士課程でも追いかけていたのに。僕の問いは、この映画の持つインパクトをいかに受け止め直すかということである。

石井妙子 評伝『魂を撮ろう』(2021) も読み終えた

映画「MINAMATA」を観た。評伝『魂を撮ろうーユージン・スミスとアイリーンの水俣』も読み終えた。複雑な感慨がある。天才的な仕事をした人でも、人は完璧ではないし、弱点も多く持つ。学者や芸術家はとくにそうだ。そのうえで、あらためて、水俣病関係の本も読み直そうと思った。

映画への感想は以下である。ユージンの辛口ユーモア（ときにはダジャレ）が溢れていた。彼の撮る写真への飽くなき拘りが歴史に残る作品をつくった。そして、彼には、誰もが惹きつけられるお茶目さや、言葉ができなくともその場に溶け込める気さくさ、写真をとるときに黒子のように自分を目立たなくできる経験的カメラ撮影技量があった。またエリートにはないアメリカ人の素朴さがあったといわれる。

しかし、他方では、育つ過程での母の支配があり、逆に依存があった。これが、他者への依存や人格的支配が同居する人間性として、あらわれ、とくに女性との関係が、従軍カメラマン時代の傷の後遺症（沖縄戦での身体に砲弾のかけらが残った）もあり、身体的依存＝支配の複雑さがあった。四度に及ぶ結婚（離婚）があり、写真に向かうときは、睡眠をとらず没頭する（撮影、現像、プリント）無茶をする生活（また、常にアルコールなしでは過ごせず、薬物と、歯がなく固形物をとれず、牛乳と混ぜた流動食しか取らなかった）など複雑さがユージンにはある。

アイリーンは、日系米国人（母は日本人、父は米国人）だが、複雑な出自をもつ。ユージン

と出会ったときは、20歳の学生だった。通訳として出会ったが、その後、ユージンと結婚して水俣に一緒に行くことが彼女に人生に決定的であった。ユージンは三度目の結婚、アイリーンは初婚。30歳も年が違うユージンとアイリーンの二人が水俣に3年も住んで撮り続けることができたのはアイリーンの通訳、ユージンのケア、生活面での様々な配慮があったからであった。後に離婚するが、それもわかる気がする。（評伝には、水俣での撮影生活以前と以降も詳しく書かれている。ユージンについても、アイリーンについても詳しい。）

ユージンが死去した前後は、チッソ元社長の嶋田の死去、水俣での撮影の象徴であった上村智子さんの死去があった。裁判での勝利は、チッソの国に依存した補償をもたらしたが、水俣での根本的解決には至っていないし、訴訟はまだ続いている。

ユージンの死は工場での暴行された傷が影響していた。アイリーンは、今も公害に抗して市民活動を続けている。（京都に今は在住）赤旗日曜版記事ではお元気なアイリーンさんの姿があって、思わず嬉しくなった。

注文していた写真集が届いた。

アイリーンが写真集『MINAMATA— words and photographs by W.EUGENE SMITH and AILEEN M.SMITH』(2021)の再刊に踏み切ったのは、映画化されると聞いて、ジョニー・デップが水俣にやってきて会ったことも大きかった。映画「MINAMATA」のインパクトだ。新版、2021年9月10日刊行。そこでは、封印されていた写真も復権している。『魂を撮ろう』で石井妙子さんは「智子ちゃんが笑った」を一旦封印したのを、再刊で掲載することのアイリーンの心の揺れについて複雑な気持ちがあることを書いていた。Art か journalist で悩んで、両方とユージンは考えたのだった。今回の映画化で、アイリーンも心の迷いを振り切ったのである。

* 僕は、『ユージン・スミス A Life in

Photography 写真集』(2017)も求めた。

ユージン・スミスは、欠点もあるが、偉大な写真家(Artist, journalist)だった

ユージン・スミスは、欠点もあるが、偉大な写真家(Artist, journalist)だったと思う。integrity (清廉潔白)にこだわり、objective(客観的), fair(公平)、honest (正直)にこだわった。

1971年の回顧展は、”Let Truth Be The Prejudice “だった。先入観(Prejudice)と真実(Truth)が等しくなるようにとの願いだった。

*そこでは、アイリーンもユージンから学んだことを、愛情をもって書き、2番目の妻との子、ケヴィンも父を愛情をもって、正確に書いている。

* * 映画の反響の余波は大きく、「MINAMATA～ユージン・スミスの遺志」【テレメンタリー2020】2021.4.28が制作されもした。10月3日には、朝日新聞は3面も使って、MINAMATAで特集を組んだ。あらためて再注目されるユージン・スミスとアイリーン。水俣病と公害の歴史と現実。僕もあらためて、学び直した。

さっぽろ<子育て・教育>フェスティバル2021の報告

笑顔が輝く 子どもと大人の未来 一子どもが主人公で居場所をつくるー

子ども・若者の権利から考える

谷 光 (道民の会代表世話人、
北海道子どもセンター・子どもの権利委員会)

はじめに

私は退職後、「外国人につながる子どもたちへの日本語学習指導」のボランティアをしています。

モンゴルの少年(3年生)とのある日のエピソードです。

N君はモンゴルから来た3年生。入学前から日本に住んでいるので日常会話は何とか出来る。今は教科の補習を中心に週2回計2コマの支援している。この日は、部屋にだまっ

T おはよう 元気ですか？

N (返事なし、だまって席に座る 机に頭をつけてじっとしている)

T 今日は、何月何日？何曜日ですか？ (毎回のルーティンとして日時、曜日、天気などを話題に)

N (そのままの姿勢で、無言)

T 今日は9月22日、水曜日、天気 くもりです。

N (無言)

T そうか、勉強はしたくないのか！ (サイコロを出して)すごろくをするか？

N (黙ってすごろくを始める)

しばらく遊んだ後、紙に「きょうは こえがでないの？」と書くと「こえでるよ」と書く、

応答する気はありそうなので、そのまま筆談を続けることに

どうしてしゃべらないの？

「しゃべりたくない」

なにかあったの？

「なにもない」

そうですか、じゃあなんの勉強をしますか？

「やだ」

勉強はしたくないの？

「おうちで勉強する」

どんな勉強をするの？

「コロコロ本を読む」

じゃ、今日はなにをするの？

「なにもしない」

教室でいやなことあったの？

「ない」

今日は勉強しないの？

「かんたんなものしたい」

(点つなぎのプリントを出して)これする？

黙ってやり出す。

1 時間目はなんの勉強をしたの？

「音楽」

2 時間目は？

「体育」

たのしかった？

「たのしかったにきまってるでしょう」

その後、私が聞かないのに、こんなことを書きだした。

「ママがともだちとしゃべらないでといった」

「わるいことするからともだちとしゃべらないでといった」

「日曜日、Aがおにごっこでするした」

「ゆびをたてた」(中指を立てるポーズをする)

そうか、けんかしたんだ。なかなかおりした？

「BとCとDはなかなかおりする、でもAはいやだ」

みんなとけんかしたんじゃないんでしょう？

「BやCやD…はやさしい」

こんなやり取りをしているうちに3時間目の終わりの時間になった。それでも、すっきりした顔になって帰っていった。子どもの世界によくある遊びの中でのトラブルだが、言葉で渡り合うことのできないNにとっては頭にきたことだったのかもしれない。多分、そのことを母さんに言ったら、「そんな子と遊ぶんでない」と片づけられ、休みの日のことなのでもあり先生にも言えないで、嫌な気持ちを抱えていたのかもしれないと思った。(後で、わかったのだが中休みにまたAとトラブってそれを引きずっていたようだった)

Nの言い分しか聞いていないのでAがやったことはよくわからないが、中指を立てるしぐさは、英語で“Fuck you”(くたばれ)などの強い侮蔑の表現に相当するという。それをNがそれをどう受け取ったのかもよくはわからないが嫌な気持ちにな

ったことは想像できる。

そんな気持ちを伝えることができたことはNにとっては大切な時間だったのだと思う。

彼の支援は、もう一人、日本語指導の加配の先生が巡回指導で関わっている。指導記録は共有しているのでそれを見る限りでは真面目に勉強している様子だ。「K先生の時間はまじめにやっているのに、谷先生の時はがんばらないのはどうして？」と聞くと、「谷先生の勉強はむずいから」とにやっとする。私は、彼が1年のときから関わっているのに、どうやらわがママを言える相手になっているようだ。教室ではそれなりに頑張り、ここでは気ままにと彼なりにバランスをとっているのかもしれない。それも大切なことかもしれないと思う。

次の支援の日も、同じようなことが続いた。また、筆談をした。トラブルの原因は学校から帰って、友達の家何人が集まりゲームで遊んでいるときのことを引きずっていることが分かった。

フェスの報告なのに、こんなことを書き出したのは、どの子ども本当は聞いてほしいこと、聞き取ってほしいことを抱えているのではないかと思ったからです。でも、たくさん子どもたちを相手にしている先生にはそんな余裕はないのも事実です。多くの子どもたちは我慢して「いい子」でいるのではないかと思うのです。

1 話題提供

**札幌市子どもの権利条例のこれまで、これから
制定から13年の今、
札幌の子どもの権利条例を考える**

私の話題提供は「1.市民の力で成立した権利条例、2.権利条例があることで何か変わったの？、3.『あってよかった』と言えるために」ということを述べさせてもらいました。

札幌市の子どもの権利条例はご存じのように2007年の制定まで4年もかかりました。全国的な子どもの権利に対するバッシングの中でした。子どもの権利条例が成立したこと

で、子どもの権利が大きく前進したかという
と、残念ながらそうではありません。それで
も、札幌市の子どもに関する推進計画には基
本施策に関わる12の部局が計画に盛り込ま
なくてはならなくなっています。それぞれに
温度差があり、とても十分なものとはいえま
せん。しかし、計画にあることは大事なこと
です。これを実効あるものに進化させていく
のは市民の力です。とりわけ注視しなくては
ならないのは、子どもの権利条約・条例の理
念が学校に入っていない状況です。政府・
文科省が成立以来一貫して無視するに等しい
姿勢をとり、むしろ国連子どもの権利委員
会の度重なる勧告にあるように「極度に競争
的な教育制度」の教育施策を推進している中、
学校では「子どもの権利どころではない」と
いうような状況が続いているのではないでし
ょうか。こうした中で、さっぽろ子ども・若
者白書づくりは「子どもの権利実現に向けて
の市民的検証の実践」(増山均)として役割を
果たしている大切な取り組みになっている。

2 シンポジウム

子どものことは子どもに聴く

報告1 渡邊千絵子さん

学童保育かがやき

報告2 渡辺健さん 小学校教員

報告3 吉田圭子さん 中学校教員

報告4 本間康子さん 高校教員

学童保育の指導員の渡邊さんは、先日の白
書発刊記念シンポ第3弾「学童保育の子ども
たちと札幌市子どもの権利条例」での報告を
もとに「子どもたちが自由に過ごせる放課後
の時間、空間、遊びの現状」を報告してくれ
ました。

続いて、小学校の渡辺先生が学級の3年生
の子どもたちに、学校、放課後の生活につい
て聞き取ったことを報告してくれました。(渡
辺先生がワクチン接種の日と重なったため
佐々木先生が代理で)

3番目の中学校の吉田先生は分刻みで進め
られる日課の中で、子どもたちの「本音」
を聞くのが難しいと、毎朝生徒たちに書いて
もらう「ログブック」に現れる子どもたちの
思いを紹介しつつ、報告してくれました。

最後に、高校の本間先生は北海道高教組が
実施した「高校生向けアンケート集計結果」
(回答数367)

を紹介し、それを本間先生がどう読み取った
のかを報告してくれました。高校生たちの眩
きがリアルでとても面白いものでした。

4人の報告を聞いて、私が感じたことの
一つは小学生から高校生までの声を聞かせて
もらって、なるほど子どもたちはこうして成
長していくのだということです。小学生の多
くはこんなコロナ禍でも「学校は楽しい」と
言います。学童に通っている子どもたちは別
として、多く子どもたちは学校が唯一友達と
交わることのできる場所になっているのです。
中学校、高校になると、大人や社会に対する
まなざしが鋭くなり、子どもたちの反応は極
めてシビアなものになっています。二つ目は、
学校生活が極めて窮屈な日課に閉じ込められ、
勉強が終わると即下校というように「学校が
子どもたちの広場になっていない」のではな
いか、その中で先生方が雑談することもまま
ならない状況に置かれている現状が語られま
した。三つ目は、本間先生は「養護教諭の仕
事は、子どもの話を聞かないと始まらない。
つぶやきを拾うこと、そこから子どもの声を
聞き取る力をつけることが求められている」
と語ってくれた言葉です。「子どもにとって
大事はそれぞれみんな違うのに、大人の大事
を子どもに押し付けてはいないか」と言っ
たのがぐさりと響きました。大人が子ども
の声に(声なき声も聞き取って)応答してい
るかが問われているのではないかというの
が4人の報告を通して語られたのではない
かと思います。改めて、子どもの声を聞き
取ることの大切さを確認できたシンポだ
ったと思います。

白書発刊記念シンポ第3弾「学童保育の
子どもたちと札幌市子どもの権利条例」
では、学童の子どもたちがこのコロナ
禍で遅く生活している様子に、「子ども
たちも大変だ」とある種の固定的な思
いを持っていることを考えさせられま
した。今回の子どもの声を聞いた先
生方の話の中に「子どもたちが1年
以上のコロナ禍の生活に慣れてしま
っていること、その限られた条件
の中でも楽しみを見つけようする
子どものけなげな姿」も語られた

ように思います。しかし、小3の子どもたちの「・マスクを苦しい・疲れた・学校たいへん」という声もあり、高校生の「高校生活つづきようなことをしないでほしい」という叫びもしっかり受け止めることが必要だと思いました。

一端終了後、参加した皆さんからの感想を出してもらい交流しました。オンラインでの時間の制約もあり、難しいのですが、第1部、第2部といった設定するなどもう少し参加者

の交流の時間があるとよかったかなと思いました。

こう書いている日の朝刊に「コロナ禍不登校最多」という見出しと自殺した小中高生が過去最多(小7中103高306)という報道がありました。こうした聞き取ることの難しい子どもたちの声なき声にどう迫るかが課題なのだと思います。そんな企画が必要ですね。

「さっぽろ 子ども・若者白書2020」発刊記念第3弾シンポ 「学童保育の子どもたちと『札幌市子どもの権利条例』 ～学童保育指導員が語る～

「さっぽろ 子ども・若者白書』をつくる会 柳 憲一
(北海道子どもセンター事務局)

1. はじめに

9月14日に、標記のZOOMミーティングによるシンポジウムをおこないました。このシンポジウムの企画は、“子どもの権利”とりわけ“意見表明権”について、大人の側の応答が全く不十分なのではないかという問題意識から出発しました。

2019年3月に出版された国連子どもの権利委員会による「日本政府第4・5回統合報告書に関する最終所見」は、21パラグラフでは、「……本委員会は、子どもに影響を与えるすべての事柄において自由に意見を表明する子どもの権利が尊重され得ていないことを、依然として深く懸念している。」と、また22パラグラフで、「……意見を持つことのできるいかなる子どもにも、年齢の制限なく、子どもに影響を与えるすべての事柄について、その意見を自由に表明する権利を確保し、脅かしと罰から子どもを守り、子どもの意見が適切に重視されることを確保するよう締約国に要請する。本委員会は、さらに、聞かれる権利を子どもが行行使することを可能とする環境を提供すること、および、家庭、学校、代替的ケア、保健、医療において、子どもに

関する司法手続、行政手続において、また、地域社会において、環境に関する事柄を含むすべての関係する問題について、すべての子どもにとって意義があり、その力を伸ばし、発揮させるような参加を積極的に促進することを締約国に勧告する」と日本政府に求めています。

子どもの権利条約市民・NGOの会事務局長の世取山洋介さん(新潟大)は、「国連子どもの権利委員会第4・5回最終所見全体を読み解く～子ども期、意見表明、保護」(子どもの権利条約市民・NGOの会『通信』別冊2019年3月25日発行)の中で、「政府には意見表明権を『可能にする環境』を提供する義務があるのだ、ということが示されている」「意見表明権を阻害するような要素、例えば、権威主義や暴力がないこと」「政府はこのような阻害的な要素を除去することが義務づけられます」と述べています。

また、「今回の最終所見で指摘されている学校のストレスフルな状況(パラ39)が阻害的な要素にあたることは明白です」「意見表明権を『可能にする』環境の中核には、ありのままに受け入れられ、子どもの声に応答す

るような子どもと大人との間の相互的な人間関係が座るので、このような人間関係を整え、実現していくための措置をとることも勧告されたと理解すべきです」とも述べています。

その上で、「パラ22は、パラ4において『緊急的な措置が執られなければならない』勧告の一つに挙げられています。……『極度に競争的な性格』はもとより、体罰、校則、そして、ゼロ・トレランス政策や学習スタンダードなど、子どもにストレスを与えている施策を全面的に改め、かつ、子どもと教師との間の相互的な人間関係を実現することも『緊急』におこなわれるべきことになるのです』と述べています。

2. 子どもの意見表明権は、応答する大人の存在があってこそ

塚本智宏さん（札幌国際大）は、「現在の意見表明・参加の権利として種々試みられていることは、正直、現状では試行錯誤に留まると見えます。意見表明者を少なくとも彼・彼女らが参加する場・社会で必要な影響をもたらす可能性ある人間存在として認め、等身大の世界を代表する意見表明が誠実に受け止められ、その参加がこの社会の発展に不可欠で貴重なものと見なされるようになっているのだと私にはまだ見えていない。言い換えるとそのような人間の意見表明として大人が受け取ることができるほどに、大人社会の側がまだ成長できていないということです」（「さっぽろ 子ども・若者白書2020」p.5右段）と述べています。

私たちは、6月に白書発刊記念シンポ第2弾として『赤ちゃん(乳幼児期)と『札幌市子どもの権利条例』と題して、『権利主体としての札幌市民としての赤ちゃん(乳幼児期)について立ち止まってちょっと考えてみませんか』という集まりをZOOMミーティングでおこないました。塚本智宏さんに基調提案していただき、豊田直美さん(子育て支援ワーカーズ)、柴野邦子さん(光星はとポップ保育園)、根深まなみさん(2歳児の保護者)に報告していただきました。赤ちゃんの泣く・笑うも含めた一挙手一投足が意見表明であり、それに応

答する大人の存在により発達につながっていくことなどを学び合うことができました。

3. 第3弾は、

“小学生のことは小学生に聴く”

……学童保育の指導員に子どもの声を聴いてもらおう……

(1) 聴かせてもらいたいことをあげて学童指導員の方にお問い合わせしました

- ①学校や先生のこと、聴かせて
 - ・楽しい？嫌だったこと ・勉強はどう？おもしろい？ ・遊びはどう？遊べてる？
 - ・「いやだ」と思うこと されたことは？ したことは？
 - ・先生とおしゃべりしてる？
- ②お家でのこと、聴かせて
 - ・保護者はどう？ ・おしゃべりできているの？ ・おしゃべりするのとはどんなこと？
 - ・保護者は忙しいの？
 - ・保護者がコロナ禍で困っていることってどんなこと？
- ③学童(保育所)のこと
 - ・学童は楽しい？ どんなとき思うの？
 - ・遊びでは何がおもしろいの？
 - ・学童で遊んでいるときって、どんな気持ち？
 - ・もっと、こうなればいいのになと思うことを教えて？
 - ・学童の中で、自分の居場所がないときってあるの？
 - ・学童に来ていない人たちって、どう？
- ④あなたのこと、聴かせて
 - ・最近、1番頭にきたことは？
 - ・最近、1番嬉しかったことは？
 - ・1番大人に(〇〇に)言いたいことは？

(2) 3つの学童保育所で、指導員の方が子ども達にインタビュー？聴かせてもらいました

○札幌市西区福井（えぞりすクラブ）

元秋雅勝さん

○札幌市西区西野（なかよしどろんこクラブ） 宇夫佳代子さん

○札幌市中央区桑園（かがやきクラブ）
山本史乃さん



（３）学校のこと・先生のことなどで、子ども達は……

（元秋さん） 質問のところ、意見表明について“行事などについて色々意見があるのかな”とありましたが、学年全体などの大きな行事の時には、意見を聞いてくれる場はないと言っていました。「全くない」「聞いてほしいと思う」と言っていました。自分たちで決められる行事の中身といっても、そこは子ども達が決めてくださいねとプログラムされていて、枠の中での自由しかなかったりするの、全然物足りなくて、と。

一方で、学童では高学年の取り組みなどでは、やりたいかやりたくないから始まって、何のためにやりたいのか、どんなことをやりたいのか、具体的にどんなことをやっていくのかなどを話し合っていて、10回とか10何回とか話し合いを重ねていって実現してきたりするの、それに慣れている子どもからすると、自由度が足りないという不満がやっぱりあるような感じでしたね。

「先生はどうか」と聞いたときに、結構みんな先生のことを好きというか信頼しているというか、「優しい」「おもしろい」「明るい」「元気」というように、先生の個性等をいっぱい教えてくれたりしました。その中で、さすがに先生すごいな、かっこいいなと思ったのは、「忙しいはずなのに忙しげに聞いてくれる」とか、「がっかり怒ってもパッと切り替えて暗い重い雰囲気を引きずらないようにしてくれる」とか（僕苦手なんです）、休み時間に一緒に遊んでくれる先生は人気の先生でしたね。クラスを楽しくするためにいろいろ考えてくれるとか。高評

価の子はそんな感じでした。

一方、悪口もすごくて、先生に聞かせたら先生学校に来るのが嫌になるのではと思うほど文句がいっぱい出ていました。特にイヤだということでは、「みんなの前で怒る」とか、「〇年生なんだから」とか、「〇班は・・・だから」とか、「個人じゃなくてグル

ープや年齢などでざっくり分けて叱る」とか「馬鹿にする」とか、そういうのは「自分を見てくれている気がなくてイヤだ」というようなことを言っていたり、「差別する先生はイヤだ」「うるさく細かい」のは人気がないということでしょうか。

（宇夫さん） 意外と私は驚きました。それぞれ各教科の好き嫌いとかあると思うんですが一番意外だったのが「話し合いができる活動が一番楽しい」と言っていました。学活

とか。「学活の何が楽しいの？」と聞くと、私の小学生時代の学活というと何か堅苦しいことを話し合っていたような気がするのですが、最近の学校では何か楽しいことを学活の中で話し合いをしているようなので、何かそれが「すごく楽しい」と言っていました。「準備が楽しい」と言っていましたね。

後は「昼休みに友達と遊ぶことが楽しいんだけど担任の先生とのたわいない雑談」、あのう、私たちと一緒に内容の話を学校の先生ともしてるんだなあ聞いていてわかりました。テストの丸つけを担当がしている時は、みんなで円陣を組んでやっているような感じで、「合ってる、合ってる」とまるでゲームを側で見ているような感じで、本人は思い切りお手伝いをしているようなつもりなんです。なんかこういうのも「楽しい」と言っていました。

「コロナ禍で行事が変わるとき、意見を聞いてくれるの」と聞くと、即答で「ない」と言っていましたね。「でもさ、運動会中止になるとか、無観客になるとかというとき、それなりの説明があるでしょ」と聞き返すと、「教育委員会から無観客にとか中止にと指示があるからと言われたら、もうそれ以上言えない」と言っていました。正直な言葉ですよ。

学年主任の担任だったりすると「とにかく忙しそうだ」と6年生の子が言っていました。よく見ているなど。行事の前、週末・月末、テストの前後、コロナ緊急事態宣言・蔓延防止対策時とか、大人の事情で「授業が変更になるときとか、他のクラスの先生の意見も聞き取りながら、あちこち回っている。ほとんど小走りだ」と言っていましたけど。「すごく大変そうだ」と言っています。先生自身も大変だと言っ

ているし、やはり担任の行動を客観的に捉えている印象がすごく大人だなと思いました。私が小学生の時そんなところまで見ていたかなと正直思います。

子ども達に聞いてみて、コロナ前と今とで学校生活での大きな違いはなくて、やっぱり子どもの方が前向きなんだなと、子ども達の“こうもできる、ああもできる”という話を聞いていたら、学童の指導員でさえわくわくしてくる気分になれたのは、すごく大きな気づきだったなと思います。

(山本さん) 「学校は楽しい？」と聞くとほとんどの子は「楽しい」と。“楽しくない”という子はいませんでした。そこも何か嬉しいなと。私はあまり学校が好きではなかったの「すごいなあ」と思いながら聞いたんですが。

うちの地域は、結構中学受験をする子ども達も多い中なので、「勉強の方はどうなの？」と聞きました。そうすると、13人中「おもしろい」「まあまあ」というのが12人。なので、「わかるかい、勉強の内容はわかるの？」と聞いたら、ほとんど「わかる」と。その中でも難しいのは「算数だ」といいます。高学年なので、3・4年生のところちょっとつまずいている子なんかは「5年生の算数はちょっと苦しいな」と言っていたのですが、「授業が終わったあとでも先生と話す機会がたくさんあるので、わからなかったところは積極的に聞いているんだ。そしたら先生もていねいに教えてくれるんだよ」と教えてくれました。

子ども達は先生との関わりで悪い印象があまりなかったの、「先生の素敵なのってどういう所なの？」と先生との話をちょっと聞きました。去年・一昨年くらいの高学年の子は学校から帰ってきたら「はあ」とため息ついたあと、「こうだったんだ」「ああだったんだ」と先生についての愚痴を言ったのですが、今のその学年の子ども達は、そういうことが少ないですね。先生の素敵ところは、「いつでも笑わしてくれる」ということと、あと先生自身も「自分たちに苦手なことにチャレンジしなよと言うけれど、先生も苦手なことにチャレンジしてる。その姿がすごく嬉しい」と。「苦手なことなんだけど、自分たちと一緒にやってくれるからすごく嬉しいし楽しんだ」ということを教えてくれました。

あとは、「熱い先生がいる」ということ。すごく熱心ということですね。その先生の熱さに「みんな引くこともあるんだけど」、でも、今のコロナ禍で学校行事も中止や形を変えてやるってことにたいして、せめてクラスのみみんなとはということで、みんなのために体育館を1時間とってくれたりとか、みんなであわあできる。そういう所は、「すごく素敵だよ」と。あと、「休み時間は一緒に遊んでくれるところ」。

「高学年の先生でも一緒に遊んでくれるのが先生の素敵なのところですよ」を教えてくださいました。

逆に「嫌なところってあるの？」と聞くと、「こうやりなさい」とか「・・・しなさい」、「あれしなさい」「これしなさい」。“やりなさい”という言葉は子ども達はあまり好きじゃない。そういう言葉が何回も聞こえてくるので「それはちょっと嫌だな」というところですね。あとは、「先生の話が長い」「途中で、最初何を言っていたのか忘れちゃうんだ」と正直に6年生の子が言っていました。また、「これはみんなできるよねと、決めつけられる。やる気がおきないんだ」という話をしてくれましたね。

“学校が楽しい”って子ども達が感じているのは、“どういうこと？”“どういうところ？”

(元秋さん) 僕のところは、「友だちがいっぱいいる」というところなのかなと。結構「行きたくない」とか言っている中でも「楽しい」と言っているのは“友だちと”ということなのかなと思います。

(山本さん) うちも同じだと思います。たくさん友だち。高学年なので、知れた顔があるというところで、学校の勉強以外でも体を使って遊べたり交流できたりするところかなというふうには思いません。

(4) 放課後のこと・お家でのことなどで子ども達は……

(宇夫さん) 「みんなのお父さん・お母さん、コロナになって、職場もいろいろ変化があって大変だね」「体を壊さないでいてくれるといいね」なんて言うと、一同一瞬しんみりしてしまったので「あっ、ちょっとまずいことを言い過ぎてしまったのかな」とちょっと心配もしました。でも、そういういそがしく生活している中でも、子ども達とのやりとりとか、家庭内感染予防を施しての帰省家族旅行等、頑張られている様子があったので、保護者の方もリフレッシュしたんだろうなと、子ども達の話聞いて思いました。あと、面白がっては失礼なのかもしれないのですが、「父さん・母さんが職場の愚痴を言って、ついでに私が学校の愚痴を言って、家族全体で愚痴大会をしている」と。一同それを聞いて大笑いだったのです。思春期真っ盛りだったら子どもの方があまり話さないと思うんですが、そういう家族の雰囲気でない子ども達ばかりだったので、まあそういうのもありかと思いました。

あと、余談なのですが、会話の成立する塾とか習い事はある意味好評でした。この地域にはいろんな

塾があるのですが、「どうしてそこを選んだの？」と言うと「すぐ聞けるし、おしゃべりできるし」って。「おしゃべりできない塾なんてあるんだ？」というと「うん、〇〇〇〇」と言っていました。塾選びも交流が持てるかどうかというのが、保護者にとっても子どもにとっても1番のポイントなんだと、始めて子どもの話を聞いて思いました。

(山本さん) 特に印象的だったのが、男の子だったのですが「お母さんには、自分の心の中のことを話してるんだ」と教えてくれました。「心の中のことって、どんなこと？」って聞くと、やっぱり「おもしろくなかったこと」「学校であった嫌なこと」だったり、「学童であった嫌なこと」だったりということもあるのですけれど、嫌なことだけではなく、「今、こういうふうに思っているのだけれど、ママ、どう思うの」という感じでお話ができ、母親の方から〈ああじゃない〉〈こうじゃない〉と言ってくれる。そういう会話が男の子の方が多かったかなという印象ですね。高学年は女の子の方が少ないのですが、女の子たちは、お母さんとなかなかそういう話ができない」ということを言っていました。

(元秋さん) まず「親、どう？」って聞いたら、不平とか不満とかめっちゃ出てきて「言い過ぎでしょ、聞きたくないよ」と言いたくなるほど、のりで「うちもそう」「うちもそう」と盛り上がり、だから必要以上に子ども達も言ったのかもしれないけれど、「ほんとにしつこいんだ」とか「うるさいんだ」とか、「言っていることが変わる」「言っていることと自分のやっていることが違う」といろんなことを言って、思春期に入ってきてるんだな・反抗期が始まっているんだなみたいな、そういう子たちも多かったです。でも言いながら楽しそうで、子ども同士もそこで「いやあ、そうだよ」なんて言って連帯し楽しそうにしていたので、まあ、本当のところは、仲良くやっているんだろうなということは基本的に感じました。

基本的には、皆いっぱい会話をしているのかなと感じています。親御さんも頑張って「今日どんなことした？」「どんなことしたの？」とか聞いてくれて、それに「はあ？」「別に」とか言いながらこたえたりしているようです。

(5) 学童(保育所)に関わることで、子ども達は……

(山本さん) 「学童は楽しい？」と率直に聞きましたら、全員が「楽しい」と答えてくれました。「楽しいことだけじゃないんじゃないの？」とも言ったの

ですが、「それもある。でも1番は、高学年になると行事を自分たちで作れる。」「やりたいことを1から取り組むことができる」「失敗しても当日をむかえ、やりきった感を味わえるから楽しいんだよ」とも言っていました。5・6年生のほとんどの子どもが“行事をやったあとの達成感”が「いいんだよ」といいます。「嫌なことがあっても楽しいと思うよ」と教えてくれました。

「公園で何してるの？」と聞くと、“野球”“ドッチボール”“カタキ”“ドッカン”“鬼ごっこ”。どれを聞いても、個々に遊んでいるというのではなく、集団の遊びが多いなと感じました。学童ならではの、同じ学年だけでなく1年生から6年生までひっくるめて遊べる。低学年には低学年への優しさというのかな、特別ルールというものがあたり手加減をしたりする姿ももちろんあったり。

自分たちのやりたいこと、それからちょっと学校では言えないような話もここではできるということで、それもひっくるめて楽しいんですね。

その楽しいことばかりじゃなくて、やはり行事の時だったりとか、もめ事があったりとかしたときなど、嫌なこともあるだろうし、私たち「指導員に叱られる」こともあるしってというような話をして「本当に全部が全部楽しいの？」と言ったときに、「それをひっくるめて楽しいんだよ」と。「叱られることも」「だって叱られるなと思いつつ遊んでいることもあるし、言ったりやったりしていることもあるし、それもひっくるめて楽しいんだから。怒られたり文句を言われるのはイヤだけど、おもしろくないことも含めて楽しいんだよ」というふうに言ってくれて、嬉しいなと思いました。

(元秋さん) 「どんな遊びがおもしろいの？」と聞くと、山本さんが言ったと同じように「みんなで遊ぶものがおもしろい」というのは多かったかな。「遊んでいるときはどんな気持ち？」と聞くと、「何も考えていない。無理だ」と言うのから「ただひたすら遊んで」「時間忘れて」「とにかく楽しい」「言葉にならない」「他のことを考えられないくらい夢中」「小さいことが気にならなくなる」「嫌なことを忘れる」「すっきりする」「勝負で負けたら悔しい」「もっともっと思う」「生きてるって思う」「勝手にニヤニヤしている」「そんな気持ち」と勝手にババッとみんな言っていました。

「遊びのいいところってどんなところ？」と聞くと、「楽しい」「おもしろい」「自由」「自分たちでできる」「自分たちで考えたりつくったり変えたりできる」「みんなでできる」「誰とでも仲良くなれる」「誰とでも楽しくなれる」「年齢に関係なく遊べる」「男女関係

なく楽しむ」「強いとか弱いとか関係なく」「うまい・下手関係なく」「ストレス解消できる」。そんなふうなことを言っていました。

で、こっちも調子に乗って「あなたにとって遊びって、何？。一言で」と聞いたら、「すべて」とか「命かけてること」「生活そのもの」「自分を解放してくれるもの」「1番の楽しみ」「唯一の楽しみ」「生きる上で大切なもの」。何か哲学的なことを行っている子たちもいました。本当に遊ぶことが大事というか、遊んで過ごしているというのがよく感じられました。

(宇夫さん) 「こうなればいいなというようなことはないかい」と聞いたときに、西区の学童が毎年集まって〈親子ドッチボール交流会〉というのを開いていたのですけれど、コロナの関係で2年中止になっているので、“クラブの中でやりたい”という声が上がったのですが、人数が少ないので。

「例えば他のクラブに挑戦状を勝手に送りつけて（昔、挑戦状を勝手に送って野球の試合を受けてくれたクラブがあったんですよ）、受けてくれるかわからないけれど、のってくれるクラブがあったらいいよね」と話をしたら、「そんなことしてもいいの」って言うので「どれだけ受けてくれるかわからないけど、送る自由はあるでしょ」と言ったら、「そうか、おもしろそうだね」と言っていたので、みなさん、突然、自分のクラブに見慣れない文字で挑戦状が送られてきたら、少し考えてください。よろしく願います。

(6) 学童保育所って……コロナ禍で見えた学童保育の大切さ

(元秋さん) 学童なんかも自粛をうながすようにと札幌市からも言われたりするのですが、子ども達は他で我慢をしているのでここではコロナのことを忘れて遊ぼうみたいなふうに思ってやってきています。親御さんがみんなそれを理解してくれていて、「そうしてください」と言ってくれています。ここではコロナのことを忘れてやりたいことをやりましょうということで、学童保育は必要なのだと思います。高学年の子ども達こそ心が解放される・体が解放される場としてという意味でも。

(宇夫さん) 指導員自身、こんなに学童保育がニュースなどのトップになるなんて今までなかったので、学童保育という言葉に触れる・知られるというのはあまりよい内容ではなかったので、少し寂しいなと思いつつ、保護者の方から「先生たちもうつたら大変なのに、こんな時期に子どもを預かってもらいありがとうございます」と感謝されちゃって、「ああ、社会のお役に立っているんだ、私たちの仕事

って」とあらためて実感できました、私は。そういう指導員さんが多かったと思います。テンションが上がりました。

(山本さん) 今イベントごとして一切できないじゃないですか。お祭りだってなくなっちゃてるし、延期・延期ということになって結局は中止。学校行事もそうですね。今その存在意義というか親たちが今学童保育に望んでいることというか、せめて学童の中だけは、もちろん感染対策をしっかりした上で、子ども達がやりたいことをやらせて欲しいって親の思いが届く場所かなというふうに私は感じました。

だから、今回もお祭りを開催するっていったときに、やはり手で触るものが多いので、これはどうするかと言ったときに、子ども達は「手袋はいてやればいいんじゃない」とか、「いちいちその手袋ももたないから、消毒すればいいんじゃない」と言って、各お店のコーナーにはどこにでもあるような消毒液をおきながらというような工夫は、子ども達と一緒にやってきました。子ども達も「やりたいからお母さん協力して!」というふうに言ってくれたし、せめても子ども達が楽しめることを思い切りさせてあげたいという親の願いが詰まっている場所だなと思いました。

(7) 今、大人(〇〇)に言いたいことで、子ども達は……

(元秋さん) やっぱりコロナに対してということもあり、“自粛しろ”とか“行事中止”とか、「子どもばかり我慢させられて」「勝手なことをしてコロナふやしている大人が沢山いる」「オリンピックやったりして」「ふざけんな!」といった子達がいったり、「コロナ、消えろ!」と叫んでる子ども達もいました。

高学年の子たちがおやつ食べながらの時に「あろう、子どもの権利条約って知ってる?」と聞いてみたくんです。20人くらいの中で「言葉は知ってる」「中身もちょっと知ってる」という子が3・4人はいました。

ユニセフがHPで出している簡単な資料を読んで紹介すると、みんな「エーッ、そうか」「かっこいい」「使おう」とか言って、すごく関心があったような感じでした。「親も知らないんじゃないかな」「先生、知ってるのかな」「教えてやらなくちゃ」というようなことを言ったりして、10才~12才、大人の理不尽を感じたり、自分の発言などを聞いてもらえないと感じているような人が多いと思うんだけど、一つの手段になるというか、“ちから”になったのではないかなと思います。

(宇夫さん) 1番の収穫は、すごく単純でした。あのう、話をすることとか聞いてもらうことっていうのが、子どもにとってはとても楽しいことなんだなというふうに、本当に単純でした。このインタビューを2回やったのですが、そのあと、高学年が帰ってくる時の様子がちょっと違うんですね。“今日は何を質問してくるのかな”“今日はどんな話ができるかな”という感じで、やけにベタベタくっついてくる高学年、なんかかわいいなと思う今日この頃です。

(山本さん) 最後の付け足しのところで1番印象に残ったことは、「ストレスがたまっている」と。「どんなストレスがたまっているの?」と聞いたとき、最初は「いろいろなこと」と、具体的には教えてくれなかったのですが、脱線しながらいろいろな話を聞いていると“塾の宿題”や“勉強時間”に関して「ストレスがたまっている」んだということを教えてくれました。これは学校の勉強とは別の話ですね。なので、よくよく聞いていると、親と約束したみたいで、〈漢字のテスト、100点取ったら塾に行かなくてもいいよ。100点じゃなかったら塾に行っちゃおうだい〉と。で、「95点だったから塾に行くはめになった」という単純なものだったのです。「そういうこともあったんだね」と。先ほど地域的にも中学校受験が多い学校ってお伝えしましたが、やっぱり、「塾に行くのがあたりまえ」、お父さん・お母さんたちも中学受験をして私立中学校へ行ったという経験のある保護者が増えてきているので、子ども達もそれをあたりまえというような環境なんだなというふうに思いました。だから、私たちからすると中学受験なんて“すごい”と思ったのですが、今は、親たちの世代も一生懸命勉強して中学から受験をするというのがあたりまえ。だけれども「勉強すれすれ」と言われ、「宿題も多いし、塾の宿題も多い、寝るのが10時過ぎて、もう大変」「早く寝たいんだけど寝られない」「ストレスがたまっている」と言っていました。

4. 子ども達に「意見」を聴かせてもらう取り組みをあちこちで

……参加された皆さんから寄せられた意見や感想を紹介します。

○忙しいと言われる学校では子どもの権利について話す機会はなかなかないのかなぁと思います。

ですが、学童保育で子どもにも人権があるということを生活の中で伝えられるのはとてもいいなぁと感じました。

○「民間の学童保育に通える層」とそうではない層の違いに気を配ることが、今後の札幌市での大きな課題だと思います。生活保護世帯は保護者が働いて子どもの放課後の居場所が必要になると当たり前のように0円の児童クラブに行くしかないとされます。しかし生活困窮世帯ほど、子どもたちへの栄養面でも経験面でも周囲の大人の受け止める力の面でも、民間の学童保育ができることが多いです。また、児童クラブであっても民間と同程度の放課後児童健全育成事業の内容を実施することが、札幌市の子どもたちにとって必要だと思います。

○「先生と勉強したい」「先生と話したい」「話しながら帰りたい(玄関までなのに…笑)」などと、ことあるごとに話しかけてくる男子がいます。その子の顔を思い出しながら、みなさんの話を聞いていました。

○子どもの声の聞き取り方も 学童保育らしい自由を生かす工夫がよかったですね。指導員の中に蓄積されてきた専門性が自然に発揮された感じでした。

○「大人社会の側がまだ成長できていない」という塚本先生の資料の一言が目飛び込んできました。成長したいと思います。

○学童の方々のご報告は、まさに、子どもの声の代弁者(アドボケーターというらしい)で、子どもの意見表明(大人の意見聴取)の名にふさわしいものでした。

○想像以上の収穫がありとても良い時間を過ごしました。1つは子どもの自由とは心の自由だということ。自分で考え自分で決めることに1番喜びを感じるということ。もう1つはコロナ渦で休校や学級閉鎖、行動制限があることで子どもは可哀そうと言われていますが、当の子ども本人はポジティブに捉え日々を楽しんで過ごしていること。

○子どもにとっては、遊びは生きること、生活そのものなんですよ。でも今の時代は、人の人生や人間の成長発達にとって子ども期の遊びや余暇の大事さについてあまりにも軽視しすぎていることを改めて感じました。なくなっているとされる遊びに必要な「時間」「空間」「仲間」の3つの間が保障されている学童は今や貴重な場所ですね。

「社会的養護」を考える

本間康子（道民の会会員・事務局員・道立高校教諭）

オリンピックが終わり、5度目と言われるコロナの大波が到来し、自宅療養という名の棄民政策で支持率を落とした自民党総裁選がメディアを賑わせていた8月末～9月、「離婚することになって住む場所を失った（or 失う予定）」という二人の元生徒から立て続けに連絡がきた。アキには一人、リョウには二人、まだ就学前の子どもがいる。連絡をもらったその日のうちにホームレス支援のNPOに繋いで、ひとときの住まいを確保した。

高校時代のアキは学習状況も友人関係もよくて、一見何の問題もないように見えていたけれど、両親が毎晩のようにケンカを繰り返す家に居られず、セフレの家や公園がアキの居場所になっていた。そのことを私が知るようになって、ときどき夜の公園から「泊めてくれ」と電話がかかってきた。奨学金で音楽の専門学校に進んだけれど、そこで学んだ知識や技術を活かせる就職先はなくて、派遣で働いていたときに知り合った男性と妊娠を機に結婚した。夫は家事も育児も会話すらほとんどせず、家に居る時間はひたすらゲームに没頭した。そして、ある日、突然「出て行け」と言われた。

リョウの母親は浪費癖と男癖と酒癖が激しくて、その日の食費にも事欠く事態は度々あったから、そのたびにリョウが別れた実父や祖母に現金や現物を借りたりもらったりしていた。酔っ払った母親から難癖をつけられることはしょっちゅうだった。「下校途中で転んだ」「下痢が止まらない」「便秘に効く食べ物は何？」…多くの人が家庭で過ごす時間帯によくリョウから他愛のないメールが届いた。製菓の専門学校に行きたかったけれどお金がないので諦めた。卒業してすぐ働き始めた職場

は1年足らずで退職し、その後スナックで働いていたときに、そこのお客だった男性と妊娠を機に結婚したけれど、ふたりともに結婚前からあった借金が増えこそすれ減りはせず、それが離婚の引き金になった。

離婚を決めたのはアキが先。リョウはアキと仲が良くて、子育ての悩みや夫の愚痴を普段から言い合っていたから、リョウが離婚しようと思ったとき、シェルターの居心地はどうか？と、まっさきにアキに相談した。

シェルター住まいだったり、シェルターを卒業してアパート住まいになったふたりから、たびたびLINEが届く。「物干しを買いに行きたい」「布団がカビる」「要らなくなったおもちゃや子ども服を処分したい」…そのつど必要なものを運び入れ不要なものを運び出す。

様々な手続きの窓口ごとに、離婚が成立していない事情を話し疲れたアキから「心折れた…」とLINE。引っ越し先のアパートの保証人になってもらう母親と揉めたリョウから「こんな時も助けてくれないんだ…」と泣きながら電話。そのつど会いに行く。孤独を運び出し、少しばかりの安心を運び入れる。

高校時代、アキもリョウも「ただいま」と言って保健室にやってきた。高校生だったあの頃も子連れは今も、この子たちにはハウスはあっても、ホームがない。家庭という意味にとどまらない、養われ守られる場所としてのホーム。「社会的養護」という言葉にそんな意味を持たせたいと切に願う。

社会全体がホームであるような、そんな社会の心を底から望む10月、アキとリョウの元に投票ハガキは届かない。

「教育全国署名にご協力下さい」

35人学級から20人以下学級へ

今年度、大きな一歩が

全北海道教職員組合 川村安浩

今年、教育条件整備の課題で、極めて大きな前進がありました。ご存じのように、35人学級の実現です。長年の国民的悲願だった、少人数学級が動き始めました。

近年、文科省も概算要求に少人数学級関連の予算要望を多少なりとも組み込むようになってきていました。しかし、財務省は「少人数学級が教育効果を上げるという証明はなされていない」として、その要求を頑として撥ねつけてきました。

それが、義務標準法という法律を改正して、小学校の1学級の人数を40人から35人を標準とすることになったのです。今までは、標準は40人のままで、1年生だけが特例的に35人で1学級となっていたのが、「標準」が変わったのです。「人数を減らさない」が標準だったのが「人数を減らした」のが標準になったのです。これが、この一歩の大きさです。

まだまだ一歩にしか過ぎない

大きくはあるけれど、一歩にしかすぎません。実際に、国の制度の対象になるのは、今の2年生から下の子たちだけ。3年生以上の子どもたちにとっては、来年も再来年も再々来年も40人のまま変わりません。中学生高校生にとっては触れられてもいません。

多くの自治体では、独自に少人数学級を進めているところが少なくありません。9年前に滝川市の教育長に小3の35人学級実施を要請しに行った時、教育長が言いました。「教育条件整備は、国に頼っていても動かない。地方自治体が

やらなきゃならないんだ」。その言葉が今でも耳に残っています。

全国の学級数が、爆発的に増えたわけではありません。逆に教員数は、777人減りました。加配はがしで、せっかくの少人数学級ができなくなるところも出てきそうです。

この一歩を確かな歩みに

「隣の席と1m離しなさい」。教室でのコロナ感染防止のために言われたことです。「せめて、20人でなけりゃ無理だよ」多くの先生の悲鳴です。分散登校で、学級の半分しか教室にいないので子どもたちは少し寂しそうでした。でも「勉強がわかるようになった」「先生に質問できた」「先生が優しくなったみたい」と笑顔もはじけました。そんな、先生や子どもの声が、財務省の「少人数学級が効果的との証明はなされていない」という主張を押し切りました。

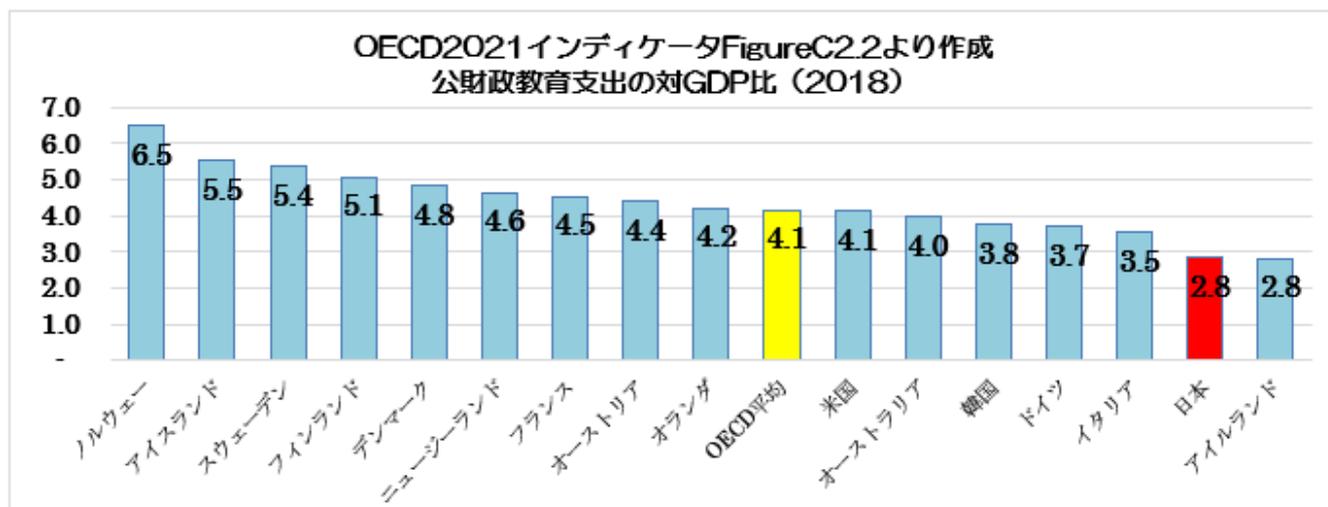
忘れてはならないのは、長年、教職員組合を中心に取組まれてきた「ゆきとどいた教育」の運動です。その地道な活動が基盤になって、コロナ禍で焦点化され、注目され、世論となったことが政治を動かしました。

「小学校2年生を35人学級に」というたったの一歩を、「小中高すべてで20人学級を、教員の大幅増員で」にむけた大きな歩みをするため、これからもご協力ください。

ゆきとどいた教育署名は、今年も、これからも、やっています。

20 人学級は希望です！

北海道高等学校教職員組合連合会 道端剛樹



上記の表にあるとおり、日本の公財政教育支出の対 GDP 比は極端に低いレベルとなっています。教育と福祉が切り捨てられています。コロナ禍でそのことがより一層あらわになりました。そして、学校でもソーシャル・ディスタンスが求められる中で、41 年ぶりに義務教育標準法が改正されたことは、我々の運動の大きな成果です。小学校では順次 35 人学級となっていきます。

しかし、私たちがめざす 20 人学級にはほど遠く、全く不十分です。20 人学級を展望し、付帯決議となっている中学校、そして学級編制の標準の在り方についても検討することとしている高校についてもいっそうの前進が必要です。

今年も教育全国署名にとり組んでいます。7月11日には「少人数学級をすすめる北海道スタート集会」が開催され、東京大学大学院教育学研究科教授の本田由紀氏を招き「少人数学級の必要性」について学びあいました。本田さんは、日本の教育の特徴は、「垂直的序列化」（能力：格差と競争）と「水平的画一化」（態度・資質：スタンダード、校則）が起き

ていること。それらは、児童生徒の出身家庭の社会階層に基づく格差と排除を生んでいることをデータから説明しました。「文科省は、学力テスト、道徳の教科化、大学入試改革などを次々と学校に求め、学校と教師は疲弊しています。教育政策で作られた「高学力」は、社会的平等化にも、経済発展にもつながっていません。」と述べられました。

学校現場は超過勤務が常態化し、さらにコロナ対応が求められ、先生方はまるでポンプの無い水槽にいる魚のような状態です。当事者でありながら署名活動に出かけるエネルギーもかなり削られてしまっているのが現状です。それでも子どもの笑顔がみられる仕事だからこそ歯を食いしばって教育をしています。コロナ禍で分散登校になり、20 人学級になったとき、先生方は子どもたち一人一人の顔をしっかりと見ることができ、子どもたちも勉強がわかりやすい！楽しい！という声が上がりました。20 人学級は希望です。

ぜひ、20 人学級をめざして全国教育署名にご協力下さい。

「地方の高校をつぶすな！～高校配置計画～」

道教委は 9 月 5 日、「公立高校配置計画」を発表し、23 年度について①留辺蘂高校を

募集停止 ②美幌高校を 1 学級減とし未来農業科に学科転換 ③名寄及び名寄産業の再編

統合で、単位制普通科 4 学級、情報技術科 1 学級を設置 ④野幌・千歳北陽に導入する新たな特色ある高校の総称を「アンビシャススクール」としました。

高教組・道教組は機械的な統廃合や学級削減に反対する声明を発表し、①留辺蘂高校募集停止に象徴される、「数の論理」に基づく配置計画の撤回 ②現場を混乱させる機械的な学級増減、年度当初の学級減はやめること ③北海道の未来のため、直ちに「指針」を撤回して、道独自に少人数学級を導入し、教育の機会均等を実現する施策を求めました。

「これからの高校づくりに関する指針」に基づく「高校配置計画」の基本となっているのは、40 人学級と 1 学年 4~8 学級という「望ましい学校規模」です。大きな学校が望ましく、小さな学校は統廃合の対象とするというのです。しかし、コロナ禍でデルタ株が広がる今、学校での感染が拡大し、「望ましい学校規模」とする学校ほど学級閉鎖や学年閉鎖が後を絶たず、感染者や出席停止になる生徒への対応が複雑化しています。部活も行事もままなりません。感染症対策においては、きめ細かで臨機応変な対応が可能な小規模校や少人数学級の優位性は明らかなのです。また、現在、校則見直しの動きが全道の高校で始まりつつありますが、道教委の言う「望ましい学校規模」の学校ではほとんど進んでいません。大規模校では学校を運営するということに精一杯で、生徒と先生の距離が遠く、生徒の声を聴き取りながら校則を改定していくということが困難なのです。1 学級では教

育活動に限られるという側面はあるものの、毎日の 6 時間の授業の中では、子どもたちに寄り添ったたのしい授業、ためになる授業も可能なのです。

また道教委は「魅力ある学校」＝「選ばれる学校である」と定義して、総合学科や単位制という学校への転換を押しつけています。しかし、今回、募集停止が決まった留辺蘂高校はそうした「魅力ある学校」であるはずの総合学科です。総合学科であれば魅力があるから生徒が集まると言う論理の破綻を道教委自らが認めたも同然です。私は北見の高校に入学できない生徒が逆流して、たばこの煙が充満する列車で通学していた時代の留辺蘂高校を知っています。その頃から思えば、今の留辺蘂高校はまさに子どもたち一人一人に寄り添った教育がされ、生徒も新しい部活を立ち上げて地域に発信するなど素晴らしい高校になっています。

高校配置計画を説明する「地域別検討協議会」を数多く傍聴しましたが、全道各地の教育委員会及び自治体の首長から道教委の「これからの高校づくりに関する指針」に対し、指針を撤回して、少人数学級を導入するよという声が巻き起こっています。我々のめざしてきた少人数学級は大きな広がりを見せ自治体も認めるものとなっています。

地域の高校を潰すことは地域の衰退にもつながります。各地域で元気で笑顔のある学校を維持していくために「高校配置計画」に反対する声を上げていく必要があります。

コラム「先生、俺、なんどもこの名刺に救われたんっすよ。」

北海道高教組書記次長 道端剛樹（どうば たけき）

初めて担任を持った生徒との再会

先日、組合の学習会で北見に行きました。オホーツクはボクが教員として 1 歩を踏み出した地です。浪人、留年して大学院を卒業し、初任として赴任したオホーツクの地ではうまくいかないことだらけでした。

特に担任としては悲惨なものでした。事件も連続し、授業に入らない生徒たち。体が持

たなくなり 1 年で降りてしまいました。そんな 1 年きりの担任でしたが、何人かの生徒とは今もつながっています。北見に行く際、そんな 23 年前に初めて担任を持ったし君と会う約束をしました。過敏性大腸炎があったりもする繊細な優しい子。でも、サッカーがとて上手な子でした。彼は識字障害があり、ひらがなの「し」も左右反対に書いてしまう

ようなことから、学習（特にテスト）はとても辛そうで、高校生活の大きな障害でした。お母さんはとても心配して何度も面談したのを覚えています。逆にボクが励まされたこともありました。学級崩壊と言っても良いような状態に、生徒のボクへの批判はけっこうなものでした。でも U 君はお母さんに、「道端先生は何も悪くないよ。おれは先生が好きだよ。」と言っていて、ボクが担任を降りることになったときには、お母さんが「ずっと U のことを見ていてもらいたかったです。」と残念がっていました。ボクも学年に残ってサポートはしていたのですが……。

学校を辞めた U 君とのつき合い

U 君は 3 年生の 7 月に学校を辞めました。部活で担任の先生がなんでもかんでも「努力が大事だ！ 頑張れ！ 頑張りが足りないやつはダメなやつだ」という先生でした。頑張ればほめられるけど、くじけた生徒には厳しい先生でした。U 君はいろんな困難を抱えていたので、万事うまくいくわけは無く、最後にうまくいかない時期が続いて先生を殴ってしまいました。傍から見ていて「学校が続くかな？」と心配していましたが、先生を殴ったことを口実に辞めてしまったことはとても残念で悔しく。退学を知ったときは印刷室で涙が抑えられなくなったことを覚えています。

ボクが担任を 1 年で辞め、彼を卒業させてあげることができなかった。それはとても悲しく悔しいことでした。それでも、彼は、10 年くらい前まで年賀状をくれていたし、その後は LINE でお仕事の話、結婚したことや子どもが生まれたことなんかを知らせてくれました。ここ 3 年くらい連絡が無くて少し心配していたけれど……（離婚して辛かったりしたらしい）。

20 年前に渡した名刺

20 年前、初任校の転勤後、U 君のお家に行った事があったことがありました。高校を辞めて数年。高校の中には暴力団につながりのある生徒もいて、そんな関わりの中から軽い気持ちで、U 君と数人はオレオレ詐欺の「受け子」をして逮捕され刑務所に入ることにな

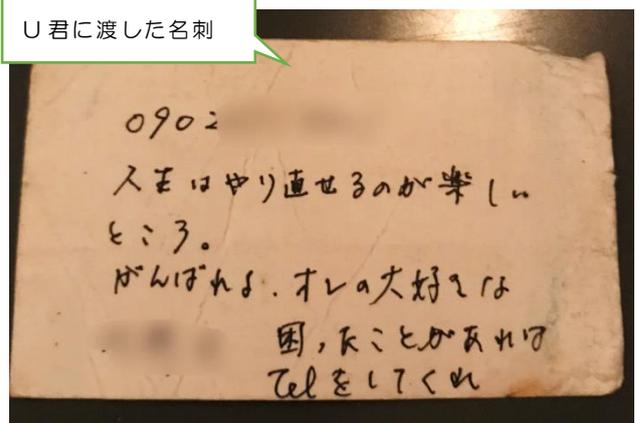
りました。執行猶予 4 年。懲役数ヶ月でした。

たまたま結婚式で町に行っていたボクはその話を聞き、彼の家に行きました。お母さんは涙ポロポロです。「ごめんなさい。もう少しで出所しますが、先生にはお世話になったのに……」と泣きじゃくっています。ボクはこのとき、直接会うことができず、お母さんしかいなかったけど、名刺を置いて来ました。

ずっと財布の中に

北見に行く際、彼と 21 年ぶりに再会しました。なんども、「先生！ いっぱい生徒がいるのに何で俺にわざわざ連絡くれて会ってくれるんすか。めっちゃうれしいっす。」と語る彼。「いやー会うまで何話して良いかって思ってたけど何も変わらないっすね。」とあのときのままです。そして話も佳境になったとき、彼は 20 年前の名刺の話をし始めました。「先生が俺に会いに来て俺がいなかったとき、名刺

U 君に渡した名刺



をおいていってくれたの覚えてますか？」というのです。ボクはすっかりそのことは忘れていました。「先生。俺、その名刺はずっと財布に入れてるんっすよ。これだけは捨てられないんですよ。」と見せてくれました。20 年間財布に入っているその名刺の裏には、ボクの汚い字で、「人生はやり直せるのが楽しいところ。がんばれよ。オレの大好きな OOOO。困ったことがあれば Tel してくれ。」と書いてありました。これを取っておいてくれたということに何とも言えない感動が胸をいっぱいにしました。そして彼は言うのです。

「先生、オレ何度もこの名刺に助けられたんだ。」と。

高卒になれず大きな失敗もし、めちゃくちゃ

や就職試験も落ちたと言っていました。子どもが2人できて離婚したけれども、たまに会いに行くとどんどん子どもは新しいお父さんに懐いていたこと。高校を辞めて22年間。いろんなことがあったのでしょ。繊細なU君だから想像がつきます。

U君のお母さんや妹からも「お兄ちゃんはそういうことが無かったらこの世にいないよね」なんて言われるんだそうです。

U君の今とこれから

U君も年を取ってきて電気設備の仕事はかなりきつそうです。電信柱を立てて電線を張る工事をしています。それはそれで誇りを持って仕事をしているように見えます。バリバリと電気が通る中、穴を240cmも掘ったり、電柱に自力で登ったりという仕事はきついんだと話してくれました。「子ども食堂をやりたい」なんて言っていました。「なんか、虐待とか、貧困とか、そんなニュース見ると俺みたいなやつが話を聞いてやれないかな。話聞いてやるだけなら俺ができるのになって思うんすよ。」って昔の優しい彼のままでした。彼らしい話だなと思いました。

彼のおかげでいっぱい学んだし、ボクもなんとかお仕事を続けられた。そんな彼の人生もちょっとだけ変わったようで、出会ってステキだな、教師ってステキな仕事だなとめっちゃ感動に浸ったのでした。

教育の意味

いま、教育は教育基本法が改定されてから「人材育成」の側面がかなり色濃くなっています。教育は「人格の完成」から「人材育成」に大きく舵を切りました。国のための人材育成か、企業のためなのかは微妙なラインですが……。高校ではロングホームルームの時間に教育産業が進路講演をすることもしょっちゅうで、「生徒の進路を決定する」ことが仕事のメインになっています。どれだけ学校で勉強させ、その成績を元に企業や大学へ輩出するか。そんな雰囲気です。でも、人生の一番輝いている若いときの3年間を一緒に過ごし、その子たちがどんな人生を歩んでいくかにとっても興味があります。そして、元気に生きていって欲しいと思うし、そんな姿を喜び合いたいと思うのです。

まだまだ、U君には困難がありそうです。再会したことで名刺の消費期限が切れてしまいそうか心配です。U君に言いました。「俺の葬式にはぜひ来てくれよ。あの時よりまともになったんだなあって、きっと思ってもらえる教師になったのが分かるからさ。」と。あと何度会えるかな。また、新しい名刺を送ろうかな。そんなことを思いながら、新しくなった雪の紋別道を帰ってきました。

(2021.10.22 道端剛樹)

コロナ禍の下で子どもたちが求めているものをめぐって

戸田 輝夫（道民の会会員）

2月15日、文科省は2020年に自殺した小中高生の数字を発表した。前年の339人から479人と大幅に増え、過去最多となっている。内訳をみると小学生14人（前年6人）、中学生136人（同96人）、高校生329人（同237人）で、特に女子高生が前年の2倍近い138人で際立っている。文科省は新型コロナウイルスの影響とみているが、詳しい分析はこれからだという（16日付朝日新聞）。

わたしは既に米寿に近い高齢者で、子どもたちとの接触はほとんど住んでいるマンショ

ンの子どもたちに限られているが、それでも彼らから聞こえてくるのは、学校生活が上意下達の強要される自粛の日常であり、その孤立した苛立ち・不安の息苦しさは、帰宅した後の家庭でも地域でも引きずって、心安らぐことがない等の声である。自殺の原因では「進路に関する悩み」「学業不振」が多く、これに続いて「親子関係の不和」が挙げられているが、前年よりも「精神疾患やうつ病」が多い（同上）のも首肯できよう。札幌市は当市の「子どもたちの最善の利益を実現する子どもの権利条約」を制定しているのに、コ

コロナ禍で一人ひとりがバラバラにされ、友達と話す機会もなく、仲間と遊んだりする日常は殆どなくなっているばかりか、希望や願い、要求などを聴かれることなどまるでないのだと、子どもたちは口々に訴えている。

マスコミから報じられてくるのは、コロナ禍の下での子どもたちの貧困、虐待、孤立等々の傷ましい、こころ痛む一人ひとりの多様な姿である。いま求められているのは、子どもたちにとって一番身近な学校空間が、そして家庭や地域が安心・安全な場になることであろうが、それが閉ざされているとなれば、どうするかである。

まずはそこで学習し、生活し、仲間と交わり合って生きている空間が子どもたち自身にとって幸せを感じられ、自己肯定の思いを膨らませてゆけるように、互いにそういう交わりのできる安心・安全な世界を、社会を形成し、回復する営みを担い合う行為・行動を自覚できるようになることが求められてこよう。その手助けができるのは、周りの教師であり、親、大人たちである。子どもばかりでなく、そのようなヘルプを求めている家族の場合にも同様である。とあれば、そういう声を聴きとれる日常の関係性をわたしたちの間に地道に築き、広げてゆくことが不可欠である。誰が孤立しているか、置き去りにされているかに目が向くようになれば、子どもたちの声も聞こえて来ようし、人とのつながりも結ばれて来よう。問題はそのかわり方である。

地域の子ども食堂（イ）や介護のデイサービス（ロ）、認知症の方たち（ハ）へのかかわり等で感じていることであるが、例えば（イ）の一方的に支援を受けてばかりいる子どもたちの場合、次第にそうされている自分への無力さ、惨めさの思いを深め、プライドが損なわれて自己評価が低くなり、自尊感情というか自己肯定の思い（セルフエスティーム）をすぼめて元気を、覇気を失っていつてしまうことに気づく。「まかない食堂」の実践は、そうした一方的な食事の提供が子どもたちの元気、やる気を奪っていることに気づき、子どもたちが自分にできることは役割を分担して働き、みんなで作った食事をみんなで食べる場に作り替え

て、その行為・行動の結果を相互に評価し、称賛し合うようにして互いにそれぞれの自己評価を高め合うことを大切にしてくと、子どもたちへの敬意と信頼に基づく共同労働の再構築を試みた事例である。（ロ）や（ハ）の場合も、介護や介助（ケア）をするにあたって、被援助者のできることまでをすべて取り上げて世話をする（デイサービス等の現場では事故の発生を事前に予測して、そうならないようあらかじめの十全な心配りから、被援助者のできることまでをさせない仕様に仕事を組み立てられている）構図は、もっぱらケアする側からの発想であって、そこにはされる側（被援助者）がそうされることでどのような思いに追い込まれてゆくかに思い至る視座が見受けられない。被援助者たちはそうされることでプライドを損ない、惨めな思いからやる気を阻喪し、されるままに自己評価をすぼめ、次第に無気力に追い込まれてゆくのである。かれらの無表情、無関心、覇気のなさ等々の表情は、こうしてかれらが自分のセルフエスティームを喪失させられた結果の像である。

ケアする側とされる側との間に相互の敬意と信頼の思いが交わされるようになってくると、そういう関係性からケアする側が用意したプログラムによって被援助者はできることをすることで失意から解放され、相互評価によって自分も大事なかけがえのない存在であることが自己確認できるようになる。こうした積み重ねの営みの中で、される側は自己評価を高めながら自尊感情、自己肯定の思い＝セルフエスティームを自分の内に確実に膨らませてゆくのである。

こうしたされる側の内部での自己肯定の膨らみが、相互に交わし合う敬意と信頼の下で安心してケアに身を委ね、人とつながるふくよかな日常を喜び、刻んでゆくようになる。そしてそこが安心と安全の場であることを確かめられると、される側の被援助者に安らかな表情が戻ってきて、あるがままに今の時間をつつがなく生きてゆくことに専念できるようになってゆくのではあるまいか。そう考える日々を、いまわたしは送っている。（元スクールカウンセラー。2021年2月26日）

【資料】 (道教組ホームページより)

2021年度「全国学力・学習状況調査」結果公表にあたって【見解】

子どもと学校を競わせ、教育を歪める「学力テスト」の中止を

～子どもたちの豊かな成長・発達を保障する教育を大切に～

2021年9月8日

全北海道教職員組合

北海道高等学校教職員組合連合会

1 コロナ禍の状況でも「全国一斉学力テスト」にこだわる文科省・道教委は、子どもたちを「全国学テ」競争へと追い込み、本来人間的成長の場である学校を歪めています

文科省は8月31日、コロナ禍のため例年よりも遅い5月27日に実施した全国の小学校6年生と中学校3年生を対象に実施した「全国学力・学習状況調査」(以下、「全国学テ」)の都道府県・政令指定都市ごとの結果を公表しました。道教委も同日、「全国学テ」の結果を受け、「すべての教科で全国平均に届いていない状況にあるものの、中学校においては、2教科ともに全国の平均正答率との差が縮まっているなど改善傾向がみられます。一方、小学校においては、2教科ともに全国平均正答率との差がひろがるなどの課題が見られます」との教育長コメントを発表しました。コロナ感染防止の対応や教育課程の組み直しなどで苦労している学校現場の状況があるのに、お構いなしの「全国学テ」実施でした。

そもそも、「全国学テ」を実施する目的は、「全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善に役立てる。・・・」と道教委も言っているように、互いに競わせることではありません。

道教委は以前から全国学テの結果が「全国平均以上」になることに執着し、全道の子ども・教員を「全国学テ」競争に追い込んできました。この道教委の姿勢は、一面的で、偏った学力観のみを根拠にし、子どもや教員ばかりでなく、家庭までも過度な点数競争に巻き込んでいます。

学校は本来、子どもたちの人間的成長の場であり、豊かな学び合いの場であるのです。「全国学テ」対策に追われ、生徒の知的好奇心を刺激する楽しい授業、人間的関わりを紡ぐ、生きいきとした学校生活に歪みが生じています。

2 コロナ感染防止の対応、長時間過密労働で授業準備の時間がとれない教員のためにも、楽しい授業を受けたい子どもたちのためにも、学力テストの中止を求めます

新型コロナのデルタ株が出現し、北海道の学校でも子どもたちのコロナ感染が広がりを見せています。多くの学校が学級閉鎖に追い込まれ、オンライン授業の準備・その他の業務が増え、学校現場は困難を抱えています。

その様な状況があるにもかかわらず、文科省・道教委による「全国学テ」が今年も実施されました。この間、「全国学テ」に向けて、全道でチャレンジテストによる反復練習や過去問対策が常態化し、「全国学テ」のための対策が学校現場に負担となっていることも明らかです。

全教が2018年に実施した学力テストアンケートでも「4割を超える学校で、事前の特別な指導を行っている。そのうち、7割を超える学校で、過去問題の指導を行っている」「独自採点・集計・

分析など教職員に大きな負担となっている」など「全国学テ」や「自治体独自学テ」が教育に大きな歪みをもたらしていることが明らかになりました。

コロナ感染防止やオンライン授業の準備、延期になった学校行事中止・見直しを含め、長時間過密労働で働く教員のためにも、知的好奇心を刺激する楽しい授業を期待する子どもたちのためにも、「全国学テ」の中止を求めます。

3 序列化や過度な競争、「学力テスト」の弊害を改め、「子どもたちの豊かな成長・発達を保障する教育」を大切にする憲法や子どもの権利条約の基本に立ち返ること

文科大臣は今年度の「全国学テ」調査結果のコメントの最後に「調査で測定できるのは学力の特定の一部であること、また、学校における教育活動の一側面であることを踏まえ、序列化や過度な競争が生じないようにするなど教育上の効果や影響に十分配慮を行っていただくようお願いいたします」と語っています。

文科大臣が心配するように、「全国学テ」の結果が新聞、その他マスコミで報道され、都道府県・政令市の平均正答率が発表されれば、都道府県の序列化に拍車をかけることとなります。県別の学テ競争が始まれば、文科省が「競争が生じないように」と言っても競争は止まるものではありません。後で序列化を批判しても文科省のポーズにしか見えないのです。

政府・文科省は、GIGA スクール構想を掲げ、ICT・デジタル技術を通じて、未来を担う創造的な人材育成による生産性向上、地方創世、その先に経済成長をめざすなど、総務省、経産省と文科省が一体となった政策を掲げています。その関連で、コンピュータ使用型学力テスト（CBT）に変更する検討・準備が文科省のワーキンググループですすめられています。CBT化が進めば、対策問題の作成、普段のテストにおいてもCBT化が加速し、教育の一側面のみを切り取り、序列化が進むばかりでなく、「学ぶ楽しさ」や「課題解決意識の醸成」など日本が世界から大きく取り残されている教育課題がますます遠のくでしょう。

2019年、国連子どもの権利委員会が子どもの権利条約の実施状況についての日本政府の定期報告を審査し、総括所見を発表しました。問題点として「あまりにも競争的な制度を含むストレスフルな学校環境から子どもを解放することを目的とする措置を強化すること」など、以前よりも強く「社会全体の競争化」が指摘され、具体的な改善措置を求める勧告が出されているのです。

文科省・道教委は、「子どもたちの豊かな成長・発達を保障する教育」という憲法や子どもの権利条約の基本に立ち返り、子どもと教員、保護者に過度のストレスをかける競争主義的な教育政策を根本的に転換することを求めます。

【事務局からのお願い】

○「メールアドレス」の登録をお願いします。

コロナ感染の収束がなかなかすすまない状況もあり、今年度は「オンライン」での学習会や昨年開催できなかった「第15回総会」開催を考えています。

オンラインでの学習交流やお知らせ・情報提供などをすすめるために、会員のみなさんから「メールアドレス」を登録していただければと思います。

登録するために、

「空メール」でも構いませんので、ご氏名を掲載して、メール送信をお願いします。

道民の会のメールアドレスは、

kodomotokyoku@gmail.com です。

右の「QRコード」を読み取ると、そのままメール送信もできます。
どちらからでも構いません。



○「会員からの通信」を送ってください

皆さんのまわりで起きている「コロナ禍の子どもたち」の様子について、お知らせください。
文字数は全く問いません。
会報等にも掲載します。
よろしくお願いします。

◎ホームページ 「子どもと教育・文化 道民の会 jimdo」で検索すると、最初に出てきます。
ホームページからも、メール送信することが可能になっています。

○「会費の納入」について

いつも「会費納入」ありがとうございます。納入の際のお願いです。郵便振替用紙を同封しました。用紙には、会費納入済み年度を記入してあります。

「No44」にて郵便振込手数料が、大幅に値上がりになったことをお知らせしました（ATMの場合80円→152円、窓口130円→203円。受取人負担となっています）が、年明け1月からは、これとは別に現金で振り込むときには「振込人負担100円」の手数料がかかることになるようです。カードや通帳からの振込は0円です。

【ご案内】

『全道合同教育研究集会』が行われます！

2021年全道合研は、昨年に引き続き新型コロナウイルスの感染収束が見込めないことから会場の確保が難しく、オンライン開催となります。コロナが子どもたちにもたらした影響を記録し、コロナ後の教育を展望することが重要だと考えています。オンライン開催は遠方から参加しやすくなるなどのメリットもありますが、やはり、教育の議論は対面であるのが一番です。いつか皆さんと集まれる日が来ることを期待しつつ、今年はオンラインでつながり、歩みを止めることなく、コロナ後の教育を展望する合研にしたいと思います。

今年の全体集会はこの春「やりすぎ教育」という著書がヒットした教育心理学者の武田信子さんを招き「学びたいことが学べる社会へ」と題して行います。やりすぎ教育とされているのは次の様な保護者・教師の教育観です。

親「がみがみ言って勉強などさせたくないけれど、勉強は将来にわたって必要なことでしょう。よそのお子さんのことはよくわかりませんが、うちの子は親が見ていなければ遊んでしまっただけ勉強などしないから、まだ親の言うことを聞く小学生のうちに頑張らせようと思います。」

先生「子どもたちの幸せを願っています。今の時代、まだまだ学歴が必要です。理想を言ってもそれが現実です。親子の希望を叶えるのが担任の役割。受験で受かった時の嬉しそうな顔が生きがいですね。」

過度に競争的な日本の教育の分析と、どうしてやりすぎ教育は行われるのか、オランダやカナダなどの海外との価値観の違いはどこにあるのか。そして、競争的な教育から子どもが主人公の教育へどのように変えていくべきか、何人かのパネリストを招きながら武田さんと一緒に考えていきます。

また、教育現場ではコロナ禍によるGIGAスクール構想の前倒しによってタブレット（パソコン）が配布され、活用が進められています。あまりにも急な変化に学校も大混乱しています。さらなる家庭の教育費の増大を招き、子どもの健康被害・いじめ被害などの他、タブレットを使用することのみが目的化され、教育方法が大きく変わるなかで、IT産業が利益のために学校に寄ってたかっています。タブレットを使用する上で、何に注意し、



2021年 合同教育研究全道集会

平和を守り真実をつらぬく民主教育の確立をめざして

***** オンライン開催 *****

2021年全道合研は、昨年に引き続き新型コロナウイルスの感染収束が見込めないことから会場の確保が難しく、オンライン開催となります。コロナが子どもたちにもたらした影響を記録し、コロナ後の教育を展望することが重要だと考えています。オンライン開催は遠方から参加しやすくなるなどのメリットもありますが、やはり、教育の議論は対面であるのが一番です。いつか皆さんと集まれる日が来ることを期待しつつ、今年はオンラインでつながり、歩みを止めることなく、コロナ後の教育を展望する合研にしたいと思います。皆さんの参加を呼びかけます。

11/6 (土) 全体集会 (講演・パネルトーク) 13:00~15:30

「学びたいことが学べる社会へ ~過度に競争的な日本の教育の中で~」

講師 武田 信子 さん
(臨床心理士 一般社団法人ジェイコ代表理事)

11/13-14 (土・日) 分科会 9:00~12:00/13:00~16:00

参加 無料 参加 申込 参加には事前のお申し込みが必要です。こちらのフォームからご登録ください。締切：10月29日(金)

お問い合わせ 全道事務局 TEL: 011-231-0816 (北海道札幌) URL: <http://goken-hokkaido.jp/wp/> MAIL: zendogoken@gmail.com

冷静に学ぶツールとしていかに使っていくべきか。そんなことも考えていきます。

参加申し込みは10月29日までですが、参加希望があれば事務局までご相談下さい。

